

## “創造”人々

アジア医師連絡協議会 AMDA (アムダ)

## 救える命があればどこへでも

命を助ける、命を救え、命を見放すな。

語り手

AMDAグループ代表・医師

菅波 茂氏



AMDAグループ代表・医師 菅波 茂氏

1946年広島県生まれ。72年岡山大学医学部卒業、77年同大学大学院修了。岡山大学在学中にアジア放浪の旅に出て、その多様性に魅了され、80年アジア医学生国際会議を組織。81年の菅波内科医院開業の傍ら、84年にアジア医師連絡協議会 (AMDA=Association of Medical Doctors of Asia) を組織する。現在、AMDAグループ代表を務め、岡山に続く活動の新拠点となるマレーシアの首都クアラルンプールに在住。

アジアやアフリカを中心に世界のどこかで災害や紛争が発生すれば、誰よりも早く現地に駆け付け、緊急人道支援活動を展開しているAMDA。その活動を支える「医師」としての本質は何なのか。多国籍医師団はどんな志でつながっているのか。グループ代表の菅波 茂氏に直撃インタビューしました。

世界56カ国・地域で160件の支援活動を支えてきたボランティアの多国籍医師団

1984年設立以来、AMDAはさまざまな活動を行ってきました。ロヒンギャ難民救援活動に始まり、ホンジュラスやニカラグアを襲ったハリケーン・ミッチ、インド西部大地震、ハイチ大地震、ネパール大地震、そしてフィリピンを襲った台風30号。国内では新潟沖地震、阪神・淡路大震災、東日本大震災、直近では熊本地震など、大災害に見舞われた被災者の緊急救援のほか、ソマリア難民、モザンビーク難民そしてルワンダ難民など、アジア・アフリカの難民救援活動を含め、世界56の国や地域で160回に及ぶ支援活動を展開し、その活動は状況に応じて今も各地で継続しています。

その迅速かつ大規模な活動を支えているのは、世界30カ国、現地の団体と連携している拠点を合わせると50箇所以上を擁する海外

情報と受け皿がなければ、善意だけでは何もできない

私は高校2年の時、1枚の写真に出会いました。自分と同じ年頃の日本人兵士が海岸の浅瀬に浮いて空を見上げて死んでいるのです。その悲惨な写真に心を打たれ、世の中は平和であるべき、そのためには何としても自分自身が協力する立場でありたいと、医師の道を志したわけです。

1979年、医者になっていった私は、当時政変が続いていたカンボジアの難

民キャンプに派遣される機会を得ました。大学時代に10カ月間、アジア各地を放浪し、その多様性に引き込まれていた私は、熱い思いを持って2人の医学生と共にカンボジア難民支援に向かいました。ところが、思いもよらないことが起こります。灼けつくような日照りの中、ようやく辿り着いた難民キャンプでは支援を受け入れる体制がなく、その結果、医療活動が何一つできなかったのです。

『情報と受け皿がなければ、善意だ

けでは何もできない』—そう痛感した私は、アジア各国の医師や医学生と一緒に国際会議を開催して交流を深めたり、同時に現地政府や宗教関係者などキーパーソンとなる人たちと関係を築くことに力を注ぎました。その延長線にあるのが今のアジア医師連絡協議会、この英語表記の頭文字を取ったAMDAです。



※1) Association of Medical Doctors of Asia

支部のネットワークを生かした多国籍医師団。災害や紛争等の発生時にAMDAからの要請があると、医師や看護師など国内外のAMDA緊急医療支援ボランティアスタッフが約400人が協力して医療・看護活動などにどこよりも早く駆けつけるのです。

◀してあげるのではなく、一緒にやることでつながる、広がる信頼のネットワーク

どうしてAMDAは、多様な価値観が入り混じり、互いに分かり合うことが少なかったアジアで、信頼のネットワークが築けたのか。その答えは、AMDAの人道援助三原則の中にあります。①誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。②この気持ちの前には民族、宗教そして文化などの壁はない。③援助を受ける側にもプライドがある。

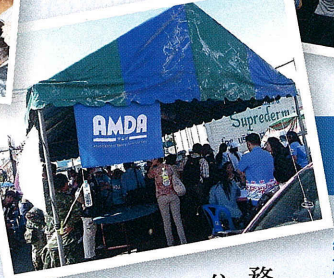
つまり、誰もが他人の役に立ちたい気持ちを持っていて、その気持ちは国境、人種、民族、文化、宗教を含め、多様な価値観を越えた所に存在する。そして、援助を受ける側には、人間のぎりぎりの尊厳としてのプライドがある。だから、「してあげる」という一方的な援助ではなく、「一緒に互いに助け合って活動してこそ、相互の信頼関係を築いていくことができる、という」ことです。

AMDAが提唱している「開かれた

相互扶助」とは、一方的に支援するスポンサーシップでもフレンドシップでもなく、パートナーシップ。「今、あなたが困っているから助けに来ました。明日、私が困ったら助けに来てください」という、互いを思い尊重し合う人間同士の絆がAMDAの活動を支えているのです。

◀決して命を見放さない、医師の基本姿勢こそパスポート

被災地で病人やケガ人を診る時、必ず実践していることがあります。それは、一人を診ている間にも、診察を待っている被災者みんなに声を掛けることです。そうすると、手当の様子を見つと見ていた被災者は安心します。誰もが「見放されたくない」のです。災害が発生すると72時間以内に現地入りすることを鉄則としているのも、被災者の「助けてほしい」「見放されたくない」気持ちに添うためです。そこで求められるのは医師であることの原点、言い換えれば、「医師免許の意味」とは何かということ。それは「命を助ける、命を救え、命を見放すな」です。医師免許に対する尊敬は国際社会に共通しており、だからこそ、医師であることが世界の被災地や難民キャンプへの、誇りと自覚のパスポートなのです。



## 医師を目指す君たちもぜひ、AMDAの活動に参加あれ!

AMDAの活動に参加しよう  
知識を経験を通して知恵に!

私は今、アジア新拠点である事務所設置に合わせて、マレーシアに住んでいます。世界の中心が欧米からアジアにシフトしつつある中、アジアのハブ空港のある首都クアラルンプールに開設された新事務所は、アジア・イスラム圏での医療支援事業の統括拠点。そして、意欲ある学生や医師を対象に、東南アジアや南西アジアの国々で約1週間、AMDAの活動に参加してもらおう新しい海外研修プログラム「グローバル人財育成」の実施拠点としても機能します。

知識を知恵に昇華させるのは経験です。それがなければただの知識に過ぎません。社会が必要とするのは多くの経験から生まれた「生きた知恵」なのです。国教であるイスラム文化、華僑を中心とした中国文化、インド系移民らのインド文化が共存し、3つの文化や価値観を肌で感じるこができるマレーシア、そしてアジア・イスラム圏での経験は、これから歩む医師としての人生をきつと大きく輝かせると信じています。

今、医学部受験に取り組んでいる君たちも、近い将来ぜひAMDAに参加して、これからの国際社会で活躍できる医師へと羽ばたいてください。